

## 論文内容の要旨

報告番号		氏名	和田 敬
Long-Term Treatment Outcomes after Intravascular Ultrasound Evaluation and Stent Placement for Atherosclerotic Subclavian Artery Obstructive Lesions  (和訳) 鎖骨下動脈閉塞性動脈硬化症に対する血管内超音波評価を併用したステント留置術の長期治療成績			

### 論文内容の要旨

背景：鎖骨下動脈閉塞性病変に対するステント留置術は有効な低侵襲治療法として報告されているが、長期成績に関する検討は少ない。本研究では血管内超音波（Intravascular Ultrasound; IVUS）を併用した鎖骨下動脈閉塞性病変に対するステント留置術の初期ならびに長期成績を検討した。

方法：対象は鎖骨下動脈狭窄および閉塞に対し、術中に病変部を IVUS で評価してステント留置術を行った 24 例 25 病変、男 20 例、女 4 例、年齢 56 - 80 歳（中央値 69 歳）である。検討項目は、手技成功率（残存狭窄 30%以下）、IVUS による石灰化の程度、上肢虚血症状、盗血現象、血圧左右差の改善の有無、周術期合併症の有無と、経過観察中の椎骨脳底動脈領域の脳梗塞発生率と再狭窄の発生頻度である。

結果：全例でステント留置および血管拡張に成功し、平均残存狭窄率は DSA ; 2.6%、IVUS;8.6%であった。IVUS による石灰化の程度は、無し ; 1(4%)、軽度 ; 23(92%)、中等度 ; 1(4%)、高度 ; 0 であった。5 例で椎骨動脈に脳塞栓予防のためにバルーンカテーテルを留置した。周術期合併症は認められず、上肢虚血症状、盗血現象、上肢血圧左右差はいずれも消失した。経過観察中に脳梗塞は認められなかった。術後 4 年経過時点でステント留置部より近位側に狭窄がみられた 1 例を除いて再狭窄はなく、全例でステント内に再狭窄は認められなかった。

結語：鎖骨下動脈閉塞性病変に対するステント留置術の初期ならびに長期治療成績は良好であり、IVUS による病変部位の評価ならびに拡張効果の評価は再狭窄率の低減に寄与する可能性が示唆された。